音楽部会

“音楽すること”から　ひろがる・深まる

１　研究の内容

「“音楽すること”からひろがる・深まる」は一昨年度より新たに設定したテーマだ。一年次は，子どもたちが音楽する中で，子ども自身がどう変容していくのかを丁寧にみとることで，ひろがる音楽や深まる音楽を探究した。２年次は,子どもたちが自ら創り出す音楽活動の中でも,特に,「自分のこだわり」と「他者の声」に焦点を当てて省察した。子どもの変容と教師のみとりをすり合わせることから，さらに子どもが音楽と楽しんで向き合えるようになると捉え研究を進めた。そして,３年次にあたる今年度。昨年までの研究を踏襲しつつも，さらに①「あそぶ・選択する」ことの中から育まれること②様々な楽器や音に出会うことで，個の音楽観の変容を追うこと③自分の音楽とは何か，考え表してみることの３点を，子どもの活動を通して多角的に分析をしてみた。

本校音楽部では，長年にわたり，小学校６年間の学びを長いスパンで捉え，発達段階や縦のつながりを考慮しながら題材を設定している。年間を通して，帯単元で授業を展開していることも特徴の一つである。一人ひとりの音楽が存在し，繰り返される音楽活動の中で，触発されながらそのカタチを大きくしていくと捉え，実践を通して子どもの姿を追っている。

（１）“音楽すること”とは

ニュージーランド出身のクリストファー・スモールが提唱した,「musicking」[*1]（以下カタカナで記す。）という考えがある。スモールは，このミュージッキングを，音楽する（to music）という動詞の，動名詞形であると定義している。「音楽する」とは，どんな立場からであれ音楽的なパフォーマンスに参加することであり，これには演奏することも聴くことも，リハーサルや練習も，パフォーマンスのための素材を提供すること（つまり作曲）も，ダンスも含まれる。とスモールは言う。まとめると，各自の立場を問わずに音楽的なパフォーマンスに加わるすべてのものが,「音楽すること」なのである。チケットの売り子や，掃除係など，裏方まで，その場に集うすべてのものが音楽に参加し，音楽を共有し，音楽に貢献しているという考えである。

本校では，この，スモールが提唱するミュージッキングの考え方，特に，立場を問わずに音楽的な活動に参加していく事こそが，自分の音楽をより豊かなものにできると捉えている。その上で，学習環境を整え，子どもたちの表現が行き交う場の設定を工夫している。

（２）ひろがる・深まる“音楽すること”

次の三つの観点を設定し実践・分析・省察していこうと考えた。

Ａ：たくさんの音楽があるフィールドで，私や他者とともに自分の音楽を更新していくこと
Ｂ：自分（たち）の“音楽すること”をみつめ，より豊かにしていこうとすること
Ｃ：友だちの音楽を聴いたり，考えを知ったりすることで，気づくこと・気づかされること

以上の観点のもと，子どもたち自身の自分の音楽との向き合い方の省察を通して，検証していく。主に次の２点を検証方法とする。①子どもの活動を動画で記録し，考察する。②活動の記録や個人の振り返りから分析する。教師も子どもと同じフィールドにいる１人の表現者として，その場その時の音楽をともに楽しみ，自らの音楽を見つめ直す姿勢を大切にしていきたいと考える。そのような営みの中で，ひろがりや深まりを見とっていきたい。

（３）学びをあむ過程こそ音楽を豊かにするのではないか

一人ひとりの表現は異なって当たり前だ。たくさんの異なった音楽表現が行き交う空間の中でこそ，自分自身の音楽も更新しやすくなる。そのような学習環境で，一人ひとりの違いを，子ども自身がどう受け止め，どう整理して，自分（たち）の音楽として，新たなものとしていくのか。この過程こそが，大切なのである。この繰り返す過程こそ，音楽ならではの学びをあむ姿と言って良いのではないかと捉えている。

２　授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

【２０１９年度：本校のカリキュラムの紹介】

先にも述べたとおり，本校のカリキュラムは，帯単元で展開していることが，特徴の一つである。

１・２年生では，からだを使って，音楽することに重点をおいている。特に１年生の入学当初は，幼児教育からのなめらかな接続を目指すべく活動に重点を置いている。その一つが，わらべうたあそびである。子どもたちは，初めて出会う仲間と，手を取り合い，ともに歌い，活動を成立させようとするのである。たった数分でも，子どもたちの中には，様々なことが起き，それを子どもたち同士で解決しようとしていく。「あそぶ」という活動の中に，音楽の授業を位置づけ，音楽的要素も取り入れている。また，１２５曲ある歌集の中から自分で選んだ曲をクラス全体で歌う活動も常時活動に位置づけている。

２・３年生では，和楽器に触れる機会も設け，多様なのモノに出会う機会を多く設定している。２年生では，江戸囃子を唱歌から体験し，締太鼓，桶胴太鼓，篠笛とアンサンブルを楽しむ。３年生になると大太鼓や箏との出会いもある。また，ソプラノリコーダーとの出会いもある。自分息がそのまま音となって表れる楽器の一つであり，自分の身体から出てくる息を感じられるよう配慮している。あそびの延長線上に位置するよう，楽曲選択にも配慮している。

４年生から６年生では，自分たちで音楽活動を計画し，実行していく「Music　Map」の時間がある。この時間は，自分の音楽を追求する時間と言っても良いだろう。自分の音楽活動をマッピングし，マップを見直す中で，修正をかけることもあれば，より深く打ち込むこともある。一人ひとりのマップが，大きな学習材に変化することもあるのだ。１時間の中の学びを，少しずつ形を変えながら次時に活かして活動していることもわかっている。

４・５年生では，様々な音や楽器に触れる機会を多く設ける。その中で，自らが音楽と向き合い，試しながら楽しむ姿が多く，次第に自分のこだわりを見つけていく。

６年生になると，楽器の選択の幅も広がり，ドラムやギター，三線などに興味を持ち始める子が多数出でてくる。たくさんの選択肢の中から，自らが音楽と向き合い，試行錯誤しながら進めていく姿が多く見られる。次第に自分の追求すべきものと出会い，没頭する姿が多い。また仲間とともに奏でる喜びや，難しさを，その時その場にいる仲間とともに共有し，さらなる活動へとつなげていく姿もある。

以上の活動に加え，一斉活動として器楽演奏（リコーダーを中心とした）や歌唱活動も行う。仲間と息をあわせるおもしろさや心地よさを感じる機会になるだけでなく，音の重なりに気づく機会になることも多い。自分で音楽と向き合う時間，集団で一つの音楽を奏でる時間を，音楽フィールドに共生させていることが，音楽することからひろがる･深まり，学びをあんでいる姿になっていると実感している。

（１）からだをつかって音楽する（低学年）

低学年では，からだ全体で活動することに重点を置いている。あそぶという活動を通して様々なことを学んでいく。低学年の時に，からだを通してたくさんのことを経験したからだは，高学年になって柔らかいからだに育つことが，過去の実践からも明らかになっている。高学年においての多様な音楽を受け入れたり，自分との異なりを受け入れたりと，音楽そのものを柔軟に受け入れることが出来るからだに育つのである。

① わらべうたあそびから

入学して間もない子どもたちは，初めて出会う仲間たちとどう関わればよいのか不安に思っている子どもも少なくない。わらべうたあそびを通して，手をつなぎ，声をあわせ，みんなで関わることで，楽しいという思いだけでなく，安心感も生まれていると考えられる。その安心感をまずは大切にしながら，間違うことを恐れずに楽しみながら回数を重ねる。子どもたちの吸収力はすさまじく，回数を重ねるごとに，声も動きも表情も豊かになる。わらべうたあそびでは，導入当初はクラス全体で遊べるものから始め，徐々にグループでのあそびや少人数のあそび，人当てのあそびも取り入れていく。遊びの種類が多くなると，教員が決めたグループ（ファミリーが２～４つ（毎回変える））で，なにで遊ぶか相談し，遊びを決める。そこでは，自分の思いのみを伝え続ける子，みんなの意見をとりまとめようとする子，相手に譲る子，いろんな子どもたちがいる中で，相談し自分たちで決め，決めたことを思いっきり楽し

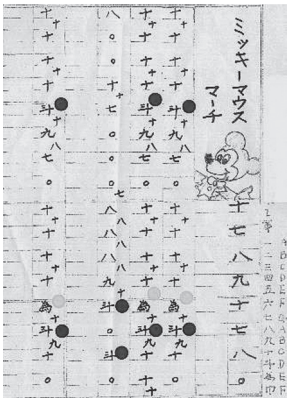
むということを大切にしている。そこではずっと決まらず遊べないことや，涙を流してしまうこともある。そのように，教師が決めたあそびを子どもがただやるのではなく，自分たちで決め取り組むことで意欲が芽生えることと共に，うまくいかないことへの葛藤を覚え，折り合いをつけることを学んでいく。他者がいることを意識する上では，大切な経験と言える。授業の終わりには必ず困ったことや，うまくいったことを全体で共有し，全体の問題として取り上げることで，自分事としても考えることができる。

② 他教科の学びから音楽へ

１年生では，協同的プロジェクトとして，１年間をかけ東村山で農家の方の力をかりた米づくりを行った。また，その活動のみで留まらず，学校の花壇を田んぼに変え土作りから収穫作業を行い，稲の生長とともに成長した学年である。音楽会では，そこでの苦労や発見，自分たちの思いを，子どもの目線で語った音楽劇として発表した。実際の活動中の子どもたちの言葉（スズメがきたけどどうする？かかしをつくろうよ・とれたおこめで，みんなでおまつりがしたい！　それって収穫祭ってことだね！）から，歌の歌詞をつくり，さらに子どもたちが曲に合わせた振り付けやかけ声を考え，子どもたちと作り上げた音楽劇であった。また，子どもたちの言葉を丁寧につみとっていくことで，活動の振り返りや，自分の思い，他者のとの思いの違いの気付きにもつながっていった。（田植えはどろどろで気持ち悪かった。え一気持ちよかったよ！・稲刈り腰が痛くなったよ。）さらに，音楽会が終わったあとも，教室の花壇をみるたびに，そこで歌われた歌を口ずさむ姿がみえ，音楽会で終わりではなく，その後もつながっていることをみてとることができる。こういった面から，「創造活動」「音楽」と時間割上は区切られている教科ではあるが，子どもの中では小学校の大きな学びとして教科を隔てることなく行き来していることがわかる。低学年の音楽は，楽器を使わずに，からだまるごとで奏でることができる。だからこそ本当に身近なものであり，朝の時間や休み時間も歌やメロディーを口ずさむ子どもがいて，それを聴き声を重ねていく子どももいる。そういった環境の中で，音楽に限らず様々な場面での活動や学び，子どもの思いを音楽を通してくみ取っていくことで，音楽の活動の広がりに可能性を感じる。

（２）本物との出会いからひろがる　～箏～　（３年生）

１０月の終わりに，お琴の先生３名をゲストティーチャーに迎え，本物に触れる機会を設けた。普段音楽室にある１３弦の箏だけでなく１７弦の箏にも出会うことができた。まず始めに「君をのせて」の演奏を全員で鑑賞した。子どもたちは様々な発見をしたようだ。「きれいな音だな」「指を立てて前後に速く動かしている」「左手で何かやっている（ビブラートなど）」というつぶやきが演奏中に聞き取れた。音色に着目しながら聴く子や，奏法に着目して聴く子もいて，一人ひとりの着目するところも異なっていたことがわかる。各自の思いを持って聴いていた姿と言えるだろう。鑑賞後，実際に３人の先生に教えてもらいながら，触れる時間を設けた。子どもたち表情からは，早く触ってみたいという思いが読み取れた。いざ楽器に正対すると，緊張感が伝わってきた。そして，音が鳴った瞬間には，満足げな表情が湧き出てきた。あるグループでは，すでに習った子が，他の子に教える姿もあった。自分が体験したことを伝え，さらには，その子が他の子に伝えと，子どもたち同士で伝承していく一光景と言うことができるのではないか。このように，子どもたちは本物と出会うことから，様々なことに気づき，習得し，さらには，自らが学びを深めていこうとする姿がうまれた。本物に出会うことから，ひろがった姿と捉えている。その後，さらに興味を持った子どもたちは，休み時間を始め，時間を見つけては箏に向き合う姿があり，何度も何度も唱歌を歌い，実際に琴の弦をはじきと，唱歌と箏の音を合わせるように自分たちで深めていったのである。このような学びは，自然と自分たちで高め合っていける素地になっていると捉えている。



（３）自分たちの表現をつくる　～全校音楽会に向けて～（３年生）

１１月の全校音楽会に向け，１０月下旬から準備を始めた。昨年度のストーリーの続編で，１人一役，多様な参加ができるよう配慮した。役を演じる子，楽器を担当する子，ダンスを考え演じる子，効果音を考える子，動きを考える子など実に多岐にわたった。子どもたちで，自分たちの発表の色づけをしてほしいという教師の願いもあり，子どもたちの自主性を重視した活動となった。ダンスチームは，メロディーや歌詞の意味を考え，それぞれのイメージとすり合わせるように振り付けを考えていった。８人のダンサーたちが，どのように舞台を使い，どのように踊るか，休み時間などを使い，ホワイトボードに書き出していた。このように主体的に作品と関わり，自分たちでより豊かにしていこうとする姿は，この先の音楽活動をひろがりのあるものに変えていくきっかけになるはずだ。大太鼓チームは，主人公の登場シーンのリズムを考えていた。唱歌を考え，それを音に変えていく。何度も何度も繰り返し試す中で，最終的なリズムが決まった。練習では，なかなか息があわない。どうすればいいか悩み，考えをぶつけ合う中で，お互いの息を感じるためには，互いが見えるように配置してはどうか，かけ声を入れて合わせてみようなど，よりよいものにしていこうとする姿があった。自分たちなりのゴールを定め，自分たちで進み，ゴールに向けともに創りあげていったリズム。この過程にこそ子どもたちなりの学びをあみ直している姿があったと考える。このほかにも担当のチームで協力し合い，学年でひとつの作品を創りあげていったのである。

（４）没頭から深まりへ　～マリンバやギターとの出会いから～（６年生）

６年生になると，使用できる楽器の種類が増える。代表的なのが，ドラムセットとギターである。ずっとやりたくて待っていた楽器の解禁に，食いつく子は少なくない。しかし，いざ楽器を触ってみると思い描いていたものとは異なり，戸惑いを現す姿も多いのが現実だ。まずは触ってみる，ということを教師も大切にし，子どもに声かけをした。毎時間毎時間コードの押さえ方の一覧表を横に置き，指を確認し，弦を鳴らしと，この繰り返しから，徐々に音が鳴るようになってきたA。ひとつのコードを習得するまでに１ヶ月近くはかかっているのではないか。ひとつのコードが鳴らせるようになると他のコードへの興味もわいてきたようだ。このようにひとつの興味から更なる興味をとつながっていった姿は，自分自身の音楽観もより豊かなものに導いていると捉える。また，練習中に他の楽曲が聞こえると，そのリズムに合わせストロークする姿もあった。これは多様な参加形態のひとつだと考える。

マリンバに４年生の頃からずっと取り組み続けている子も多い。友だちが演奏する姿をじーっと見つめ演奏してみる。次第に腕の使い方や，マレットの運び方も変わってきた。友だち同士でアドバイスし合いながら，お互いに高めあっていくのである。これは他者がいる学校という場でだからこその学びの姿と言えるのではないか。没頭し繰り返すことから，音楽がより豊かなものへと変わっていくのである。

３　今後に向けて

子どもはあそぶことから学ぶとよく聞く。そのことを，実践を通して再認識させられた。自らが音楽と向き合い，没頭し，向き合い続けることから，その子の音楽は深まり，ひろがっていくことが子どもの姿からみてとることができた。これは，今やっている実践をこれからも信じて進めることができる後押しとなる。一方で，教室空間で営まれている音楽は実に多い。個々がそれぞれの課題と向き合い，学ぶ過程を丁寧に追っていけるよう，教師も自分を高める必要性も感じた。これは継続した課題となるだろう。子どもたちの習得の速さには驚かされることが多い。教師が教えるのではなく，じっと見守る姿勢も大切であることが改めて感じることができた。子どもたちを信じ，同じフィールドにいる一表現者としての教師という意識を常に持ち続け，これからも子どもとともに音楽を楽しみ成長していきたいと考えている。

（下田・町田）

[*1] クリストファー・スモール，野澤豊一＋西島千尋訳（2011）『ミュージッキング』水声社